女子日本文法教科書

初級用

375.9
Ya13
資料室

42396
教科書文庫
4
815
42-1938
20000
35911

昭和十三年二月十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

文學博士 山田孝雄著

初級用

女子 日本文法教科書

株式會社 寶文館藏版

資料室
3959
Ya13

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 35911 圖書

例言

一、本書は高等女學校初級用の文法教科書として編纂したものである。

一、本書は昭和十二年三月改正の教授要目に準據して、主として日本口語法の全體に亘つて平易簡明を旨として記述したものである。

一、初級用の文法教科書としては多く分解のみになりがちなものであるが、本書はその弊を矯めようとして末の方に文と敬語とを説いて總合を以て終ることにした。

一、本書は注入教授、器械的記憶の弊を避け、開發的歸納的に叙述しておいた。

一、本書の練習問題は生徒に正確な知識を收得させるために、精

選したつもりである。

昭和十二年八月

著者

女子

日本文法教科書

初級用　目次

第一章　總說……一
第二章　詞の種類……二
第三章　名詞……五
第四章　代名詞……七
第五章　用言……八
第六章　形容詞……一三
第七章　動詞……一七
第八章　助動詞……三一
第九章　副詞……四四
第十章　接續詞……四八
第十一章　感動詞……四九

第十二章　助詞……五〇
第十三章　「ある」と合成した詞……六一
第十四章　文……六七
第十五章　敬語……六九

廣島大學圖書之印

女子

日本文法教科書　初級用

第一章　總說

【一】 **言語、文字、文章**　人の考へや思ふことを音聲であらはしたものを言語といひ、その言語を目に見えるやうに書きあらはすに用ゐるものを文字といひ、文字で言語を書き綴つたものを文章といふ。

【二】 **國語、國文**　自國の言語を國語といひ、自國の文章を國文といふ。即ち日本語は我々の國語であり、日本文は我々の國文である。

【三】 **口語と文語**　談話に使ふ言語と、文章に使ふ言語とは多少違ふ場合がある。前者を口語といひ、後者を文語といふ。

【四】 **文法**　すべて、言語、文章には一定の法則が在る。その法則を文法

といふ。文法によらなければ、自分の考へを正しく發表することも、他人の言語、文章を正しく會得することも出來ない。本書に主として說明するのは口語の上に行はれてゐる法則である。言語、文章の正しいかどうかといふことは國語の歷史によつて判斷するのである。

【五】**文と詞**　文法では或る一つのまとまつた考へをあらはすものを文といひ、文を組立てる材料になる一つ一つの語を詞(ことば)又は單語といふ。文法の學問では第一に詞の研究をして、次に文の研究に移るのが順序である。

第二章　詞の種類

【六】**詞の種類**　詞はその性質や作用によつて四類八種に分けることが出來る。

(一)體言……名詞　代名詞
(二)用言……形容詞　動詞
(三)副用語……副詞　接續詞　感動詞
(四)關係語……助詞

【七】**體言**　詞のうちで事物をあらはすものを體言といふ。

櫻の花が咲いた。(櫻、花は名詞)
あなたは誰ですか。(あなた、誰は代名詞)

上の例の「櫻」「花」「あなた」「誰」はいづれも體言である。體言には名詞、代名詞が屬する。

【八】**用言**　詞のうちで、人が事物について考へたことをいひあらはすものを用言といふ。

花が美しい。(美しいは形容詞)
學校へ行く。(行くは動詞)

上の例の「美しい」「行く」はいづれも用言である。用言には形容詞、動詞が

屬する。

【九】**副用語**　詞のうちで、體言、用言をたよりとして、その上に用ゐられる性質のものを副用語と名づける。

かすかに島が見える。　（かすかには副詞）

言葉卽ち思想であるといつてもよい。（卽ちは接續詞）

まあ、何といふよい曲でせう。　（まあは感動詞）

上の例の「かすかに」「卽ち」「まあ」は副用語である。副用語には副詞、接續詞、感動詞が屬する。

【一〇】**關係語**　或る語の下にあつてその語と他の語とのを關係を明かにする爲に用ゐられる詞を關係語と名づける。

椿の花が開いた。　（の、がは助詞）

上の例の「の」「が」は關係語である。關係語は助詞だけである。

練習　一

一、次の文の中の體言と用言とを區別して示せ。

(1)日章旗が朝風にひるがへる。

(2)夏の夜はあけやすい。

(3)鐵道が見える、電車が走る、自動車が飛ぶ、人影が動く。

二、次の文の中の副用語と關係語とを區別して示せ。

(1)さあ大變なことをした。

(2)だん〳〵寒くなつて來たが、あやにく薪も盡きてしまつた。

(3)それが無いと、私は天へかへることが出來ません。どうぞお返し下さいませ。

第三章　名詞

【一】蝶が花にたはむれてゐる。

紫式部は平安時代の才女である。

國語こそは國民の魂の宿る所である。

上の例の傍線を施した詞は、どれも體言であつて、これらは事物の名前として用ゐる詞である。このやうに事物の名前として用ゐる體言を**名詞**といふ。

【一三】一つ、二つ、三つ、一、二、三、あまた、すこし、いくつなどは數量をあらはしたり、順序をかぞへたりする詞である。これらは名詞に屬してゐるともいはれるが、特に**數詞**といふこともある。

練習　二

次の文の中の名詞をぬき出せ。

(1) 法隆寺は聖德太子のお建てになつた寺である。

(2) うすみどりにもえ初めた土手の上に彼岸櫻が一本今を盛りと咲き滿ちてゐる。

(3) 窓の外には楓の枝がそよ風に動いてゐる。

(4) 國語といふものは先祖から傳へられた一つの寶物で、大切な財產であります。

(5) 忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるのか影も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。

第四章　代名詞

【一三】私はいつもあなたのことを忘れません。

これは誰の書物でせう。

あちらに美しい花が咲いてゐる。

上の例の傍線を施した詞はどれも體言であつて、或る事物をさして、その名前の代りに用ゐる詞である。このやうな體言を**代名詞**といふ。

【一四】代名詞は、自分をさしていふもの(自稱)、相手をさしていふもの(對稱)話の中に出てくるものをさしていふもの(他稱)の三つに分れ、なほ他稱

をこまかく分けることも出來る。

練習　三

次の文の中の代名詞を抽き出せ。

(1)それとこれとどちらがよいでせうか。

(2)あなたは何處へおいでになりますか。

(3)あちらこちらと歩いてゐるうちに日がくれてしまひました。

(4)私はかねがね古事記を研究したいと思つてをります。それについて、何か御注意下さることはございますまいか。

(5)お前の國はどこ、又親の名は何と申す。

第五章　用言

【一五】用言の活用　體言はその形が變ることはないが、用言は用ゐられる場合によつてその形に多少の變化が起る。例へば「美しい」「行く」「ある」などの用言は次のやうに形が變る。

美しく……花が美しくさいた。
美しい……美しい花。
美しけれ……花が美しければ見たい。

行か……學校へ行かう。
行き……學校へ行きました。
行く……學校へ行く生徒。
行け……早く學校へ行け。

有ら……繪があらう。
有り……繪があります。
有る……繪がある。
有れ……繪があれば見たい。

用言がこのやうに、用ゐられる場合によつて形を變化することを用言

の活用といふ。

【一六】**語幹と語尾**　用言の活用しない部分を語幹といひ、活用する部分を語尾といふ。けれども、短い詞は語幹がそのまま活用することもある。

【一七】**活用形**　用言の活用は、詞によつていろ〳〵ちがふけれども、活用の型は多くはない。この活用の型を活用形といふ。活用形は通例次の五通りあると考へられる。

行く
- か（未然）　學校へ行かう。
- き（連用）　學校へ行きます。
- く（終止）　學校へ行く。
- け（條件）　學校へ行けばわかる。
- け（命令）　早く學校へ行け。

この五通りの活用形をそれぞれ、未然形、連用形、終止形、條件形、命令形と名づける。

【一八】未然形といふのは例へば「花が美しくば買ひませう」「雨が降らない」「私はまだ見ぬ」などの「美しく」「降ら」「見」のやうにまだその事の成立つてゐない場合をあらはすに用ゐる活用形である。その下に「ば」「ない」「ぬ」などがつく。

【一九】連用形といふのは例へば「花が美しく咲く」「雨が降りつゞく」「私は見ました」などの「美しく」「降り」「見」のやうに下の用言に連る活用形である。

【二〇】終止形といふのは例へば「花が美しい」「雨が降る」「私は花を見る」などの「美しい」「降る」「見る」のやうに語句をいひ終る場合に用ゐる基本の活用形である。この活用形は又「美しい花」「ひどく降る雨」「花を見る人」のやうに下の體言につらねるのにも用ゐられる。これを連體形ともいふ。

【二一】條件形といふのは、その事を條件とする場合をあらはす活用形で、例へば「花が美しければ買ひませう」「雨が降ればよい」「逢つて見ればわか

る」などの「美しけれ」「降れ」「見れ」がそれである。この活用形には下に必ず「ば」がつく。

【二三】命令形といふのは、命令、許容などの意味を表はす活用形で「雨よ降れ」「ふれ」「早く來て見よ」などの「降れ」「見よ」がその例である。

練習　四

一、次の用言の語尾の變化を考へて見よ。

廣い。高い。書く。押す。待つ。來る。

思ふ。走る。起きる。賞める。見る。有る。

二、次の用言の活用形についてその名稱をいへ。

(1)善い本を讀め。

(2)花が咲かない。

(3)あまり遲くなると困る。

(4)學べ、學べ一心に。

(5)大きい時計もある。

(6)これは面白い。

(7)作りなほすとよくなる。

第六章　形容詞

【二三】水は清くて流れが早い。

涼しい風が吹く。

上の傍線を施した詞は用言であつて、どれも事物の性質や有樣を說明してゐる。このやうな用言を**形容詞**といふ。

【二四】形容詞は用言であるから活用がある。例へば「赤い」といふ形容詞は次のやうに活用する。

赤く　花は赤く、實は小さい。

赤い　赤い花が咲く。

（けれ　色が赤ければ美しいでせう。

この活用はすべて右のやうにア行とカ行との二行にわたつてゐる。

【二五】形容詞には命令形は無い。その活用形は次の通りである。

良い
- く（未然）それでよくば、それにしませう。（これは普通のいひ方では無いが、稀に遣ふことがある。）
- く（連用）よく働くことが大切である。
- い（終止）それでよい、全くその通り。よい事を聞いてうれしい。
- けれ（條件）辛抱がよければ立派な人になられます。

【二六】形容詞の語尾が他の詞につゞく場合に他の音に轉ずることがある。一般にかやうに臨時に音の轉ずるのを**音便**といふ。形容詞の音便は「難有く存じます」を「難有う存じます」といふやうに連用形の「く」を「う」にかへるのである。かやうな音便を「う」の音便といふ。

練習　五

一、次の形容詞についてそれに反對する意味又は似た意味をあらはす形容詞があればいへ。

赤い。　白い。　長い。　廣い。
多い。　太い。　遠い。　よい。
甘い。　早い。　さわがしい。
うれしい。　貴い。　堅い。　低い。
淋しい。　珍らしい。　面白い。

二、次の文の中から形容詞を抽き出せ。

(1) 高い岡の上から遠くをながめる。
(2) 重く沈んだ調に暗い〳〵海の底へ引き込まれるやうな氣がする。
(3) 彼は深く肝に銘じて「きつと御志を達します」と勇ましく答へた。
(4) 櫻の花は空の青い水の美しい日本の風土にはまことにふさはしい花である。

(5)常に部屋をあかるくして生活することは衞生上大切な事である。

三、次の形容詞の活用形を示せ。

面白い。　青い。　よわい。

うるはしい。　暖かい。　樂しい。

短い。　なれなれしい。　大きい。

四、次の文の中の形容詞の活用形をいひ、且つ音便が有つたら、それをも明かに示せ。

(1)弱々しい日が遠い山の端にかゝる。

(2)孟宗藪のそばを通つて少し行くと急に明るくなつて視野が濶くなる。

(3)新年おめでたうございます。

(4)寒くもなく暑うもなく誠に心持のよい時候です。

(5)湖畔の家、道路を走る自動車、すべてが玩具のやうに小さく、玩具のやうに美しい。

第七章　動　詞

【二七】明朝は早く起きて散歩をしたいと思ふ。

霜の消える頃から組合の脱穀機の音が景氣よく聞えて來る。

田川の橋を一つ渡ると其處に櫟の並木がある。

上の文の傍線を施した詞は用言であつて、事物の動作、作用、有樣、存在などを說明してゐる。このやうな用言を動詞といふ。

【二八】動詞は用言であるから活用があるが、その活用は五十音圖の一行に限つてゐる。(五十音圖の縱の排列を行といひ、横の排列を段といふ例になつてゐる)　例へば「咲く」「爲る」といふ動詞は次のやうに各〻カ行サ行の一行だけに活用する、

(か(ア段)　咲かう。

咲（き（イ段）　咲きそろふ。
く（ウ段）　咲く。
け（エ段）　咲けばよい。

（爲）（せ（エ段）　感心せぬ者は無い。
し（イ段）　感心しました。
する（ウ段）　感心する。
すれ（ウ段）　感心すればこそである。

【二九】動詞の活用には五十音圖の四段に活用する「咲く」のやうなものがあり、三段に活用する「する」のやうなものがあり、又

過（ぎ（イ段）　眼のつけ所が低過ぎます。
ぎる（イ段）　眼のつけ所が低過ぎる。
ぎれ（イ段）　眼のつけ所が低過ぎればわからないのも尤もだ。

のやうに一段だけに止まつてそれに「る」「れ」が添はつて活用するものがある。それで、その活用の有樣を吟味して、その種類を五に區別して、それらを四段活用、カ行三段活用、サ行三段活用、上一段活用、下一段活用と名づけて區別を明かにする。

【三〇】動詞の活用形は、どの活用の種類に屬する動詞にも、必ず五通りある。次に動詞の活用の各種類についてその活用形を明かにする。

【三一】**四段活用**といふのは、ア、イ、ウ、エの四段に活用することをいふ。その活用形を示すと次のやうである。

行／段	ア	イ	ウ	エ
例／活用形	未然	連用	終止	條件	命令
カ行	か	き	く	け	け
サ押	さ	し	す	せ	せ

タ	ナ	ハ	マ	ラ
待	死	言	讀	取
た	な	は	ま	ら
ち	に	ひ	み	り
つ	ぬ	ふ	む	る
て	ね	へ	め	れ
て	ね	へ	め	れ

【三二】**カ行三段活用**といふのはイ、ウ、オの三段に活用し、ウ段の下にル、レのそはつて活用することをいふ。この活用の動詞は「くる」一語だけであつて、次のやうに活用する。

行	段	オ	イ	ウ	オ
カ	例 活用形	未然	連用	終止	條件	命令
	(來)	こ	き	くる	くれ	こ(よ)

【三三】**サ行三段活用**といふのは、イ、ウ、エの三段に活用し、ウ段の下にル、レのそはつて活用することをいふ。この活用の動詞は「する」一語だけであるが、「生ずる」「信仰する」「詠ずる」「論ずる」等のやうに漢語等を伴つて用ゐられることが多い。その時には往々濁音として活用する。

行	段	エ	イ	ウ	エ
サ	例 活用形	未然	連用	終止	條件	命令
	(爲)	せ	し	する	すれ	せ(よ)
	(生)	ぜ	じ	ずる	ずれ	ぜ(よ)

【三四】**上一段活用**といふのはイ段だけに活用し、それにル、レがそはつて活用することをいふ。その活用形は次のやうである。

行	例 活用形	未然	連用	終止	條件	命令
カ	起	き	きる	きる	きれ	き(よ)

タ	朽	ち	ち	ちる	ちれ	ち(よ)
ナ	(似)	に	に	にる	にれ	に(よ)
ハ	生	ひ	ひ	ひる	ひれ	ひ(よ)
マ	(見)	み	み	みる	みれ	み(よ)
ヤ	老	い	い	いる	いれ	い(よ)
ラ	懲	り	り	りる	りれ	り(よ)
ワ	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐれ	ゐ(よ)

【三五】下一段活用といふのはエ段だけに活用し、それにル、レがそはつて活用することをいふ。その活用形は次のやうである。

行／活用形	未然	連用	終止	條件	命令
例 ア (得)	え	え	える	えれ	え(よ)

【三六】動詞の活用表

種類	例	未然	連用	終止	條件	命令
四段	行	か	き	く	け	け
カ	受	け	け	ける	けれ	け(よ)
サ	寄	せ	せ	せる	せれ	せ(よ)
タ	捨	て	て	てる	てれ	て(よ)
ナ	兼	ね	ね	ねる	ねれ	ね(よ)
ハ	易	へ	へ	へる	へれ	へ(よ)
マ	褒	め	め	める	めれ	め(よ)
ヤ	吠	え	え	える	えれ	え(よ)
ラ	流	れ	れ	れる	れれ	れ(よ)
ワ	植	ゑ	ゑ	ゑる	ゑれ	ゑ(よ)

カ行三段	(來)	こ	き	くる	くれ	こ(よ)
サ行三段	(爲)	せ	し	する	すれ	せ(よ)
上一段	(着)	き	き	きる	きれ	き(よ)
下一段	(蹴)	け	け	ける	けれ	け(よ)

【三七】動詞活用の見分け方

(一)カ行三段活用、サ行三段活用は各一種だけであるから、先づ暗記しておけば紛れることはない。

(二)「書かない」「言はぬ」などのやうに「ない」とか「ぬ」とかがア段の音につくものは皆四段活用である。

(三)「起きない」「生ひぬ」などのやうに「ない」とか「ぬ」とかがイ段の音につくものは皆上一段活用である。

(四)「受けない」「教へぬ」などのやうに「ない」とか「ぬ」とかがエ段の音につくものは皆下一段活用である。

【三八】動詞の活用形の見わけ方

(一)「ない」「ぬ」等のつく形……未然形

(二)「て」のつく形……連用形

(三)「こと」「もの」のつく形……終止形

(四)「ば」がついて「ない」「ぬ」のつかぬ形……條件形

(五)そのまゝで又は「よ」をつけて命令になる形……命令形

【三九】動詞の音便　動詞の連用形からて、たに連なる時に音便が起る。動詞の音便には普通四種ある。

(一)「い」の音便　語尾のき、ぎのいに轉ずるもの。

書きて…書いて（カ行四段）

漕ぎて…漕いで（カ行四段の濁音）

(二)「う」の音便　語尾のひのうに轉ずるもの。

問ひて…問う（た）て（ハ行四段）

(三)「ん」の音便　語尾のに、び、み、のんに轉ずるもの。

死にて…死ん（だ）で（ナ行四段）

飛びて…飛ん（だ）で（ハ行四段の濁音）

讀みて…讀ん（だ）で（マ行四段）

(四)促まる音便　語尾ち、ひ、りの促まる音に轉ずるもの。

勝ちて…勝つ（た）て（タ行四段）

從ひて…從つ（た）て（ハ行四段）

取りて…取つ（た）て（ラ行四段）

有りて…有つ（た）て（ラ行四段）

以上の音便は何れも四段活用の詞の連用形に起るものである。

【四〇】動詞の假名遣　動詞の活用には假名遣の上に、注意せねばならぬものがある。

(イ)動詞はすべて五十音圖の一行に限つて活用する。從つて一つの語形を知れば、他の假名遣は推して知ることが出來る。

(ロ)活用に「い」を用ゐる動詞は上一段ヤ行の「射る」「鑄る」「老いる」「悔いる」「報いる」の五語だけである。

(ハ)活用に「え」をかく詞は「得」(ア行下一段)の外、ヤ行下一段活用に屬することばである。これは普通に用ゐるものは「あまえる」「愈える」「おびえる」「消える」「聞える」「こえる」(肥)(超)「凍える」「冴える」「榮える」「そばえる」「聳える」「絶える」「煮える」「はえる」(生)(映)「冷える」「吠える」「見える」等である。

(ニ)活用に「ゐ」を用ゐる詞はワ行上一段の「居る」「率ゐる」「用ゐる」の三語にすぎない。

(ホ)活用に「ゑ」を用ゐる動詞はワ行下一段の「植ゑる」「飢ゑる」「据ゑる」の三だけである。この三語の活用は誤りやすいから注意せねばならぬ。

(ヘ)以上「い」「え」「ゐ」を用ゐる動詞の外のものでそれらに紛れ易いのはハ行に活用する動詞である。それらは「い」「え」「ゐ」「ゑ」を書く動詞を覺えてしまへば、その他は「ひ」か「へ」かを書くことはいはずして明かになる。ことに四段活用にはア行、ヤ行、ワ行に活用するものが無いといふ事をよく覺えておかねばならぬ。

(ト)活用に「じ」「ず」を用ゐるのは「感ずる」「論ずる」(サ行三段)などである。

(チ)ハ行四段の「う」の音便の假名遣は誤りやすいから注意せねばならぬ。例へば「問ふて」は誤りで「問うて」が正しい。

練習　六

一、次の動詞の活用の種類をいへ。

書く。　押す。　思ふ。　取る。　着る。　死ぬ。

尋ねる。　行く。　問ふ。　落ちる。　有る。　爲る。

二、次の動詞の活用形を表につくれ。

行く。　貸す。　待つ。　買ふ。　飲む。　落ちる。　來る。　有る。

三、次の動詞の活用の見分け方を考へよ。

カ行三段　サ行三段

四段　上一段　下一段

四、次の文章の中から動詞を抽き出して、その活用の種類と活用形とをいへ。

(1)朝夕自然を友として暮すことの出來る人は本當に幸福な人と言はねばならぬ。

(2)茶屋を出て自分はそろ〳〵小金井の堤を水上の方へとのぼり初めた。

(3)けふは日がてり出した。朝から暖かだ。雞の聲が誠に長閑に聞える。麥の綠が目立つて濃くなる。隣の家ではまう馬鈴薯を植ゑた。

(4)智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

(5)夕ばえの雲の色もあせてゆけば、こつそりと待ちかまへてゐた月がほのかにさしてくる。

五、次の文中の空位に假名を加へ、且つ誤があつたら正せ。

(1)過は必ず悔○改めよ。恩は必ず報ひよ。

(2)友を誘ゐ妹等を率ゐてすずみに出かけました。

(3)この毛糸を用いて手袋を作らふ。

(4)御話が面白いので思○ず時間をすごしました。

(5)あの方は字を書ひていらつしやいます。

(6)線路に沿ふて左右に廣い梨畑がある。

(7)負ふた子に教えられて淺瀨を渡る。

(8)私には年老ひた慈母があります。併し私はこの慈母につかゐて未だ恩に報○ることが出來ません。

(9)飢えたものや凍○たものは衣食を擇ぶ暇がない。

(10)白い花が月に匂うなどは花の東海道に於ける捨て難ひ景色である。

第八章　助動詞

【四一】子供は思はず顏を見合はせた

大宮人の悠揚迫らぬ樣子が思ひやられる。

まるで人を狐か狗かのやうに考へてゐるらしい。

上の文の中の「ず」「た」「ぬ」「れる」「らしい」などは動詞の下について動詞の働きを助けるものであつて、これらは**助動詞**といはれてゐる。

【四二】助動詞は動詞の活用の附屬物であつて、單語ではない。これは動詞の或る活用について、その間に他の語を入れることを許さないもの

であつて、それのついたものをそのまゝ一の動詞として取扱はなければならないものである。

【四三】助動詞も動詞、形容詞と同じやうに、その用ゐられる場合によつて形をかへることがある。例へば「れる」といふ助動詞は次のやうに活用する。

叱られ　れ　叱られますよ。
叱られる　本當は私は叱られるか、何うかを知らなかつた。
叱られれ　父や母に叱られればとて腹を立てゝはならぬ。

助動詞の活用には下一段活用に似たもの、形容詞の形をしたもの、特別のものなどがある。

【四四】助動詞はその所屬から見て、未然形附屬のもの、連用形附屬のもの、終止形附屬のものの三種に大別することが出來る。

(1)未然形附屬のもの

れる、られる。せる、させる。
う、よう。　ぬ。　ない。

(2)連用形附屬のもの

た。　て。　たい。

(3)終止形附屬のもの

らしい。　まい。

【四五】**れる　られる**

時には機械をこはしたといつて叱られ、村の青年たちからは男のくせにとあざけられた。

さうすれば、まう針の山へ追ひ上げられることもなく、血の池に沈められることもある筈はございません。

(1)上の例の「れる」「られる」は共に動作を他から受ける意味卽ち受身をあらはすに用ゐられる。又

一分間に二百米は走られる。

如何にも人氣が篤實な地方であるといふことが明かに察せられる。

(2)上の例のやうに或る事をなし得ること即ち能力をあらはすに用ゐられることもある。又

若い侍從の人々が長い御行列を後になり、先になりして心を配り、指揮を取られる。有樣は誠にめざましいものであつた。

御側近の方々が奉仕に努められたことも亦涙ぐましいものであつた。

(3)此の例のやうに敬意をあらはすに用ゐられることもある。これらの助動詞の活用形は動詞の場合と同じ方法で知ることが出來る。この「れる」「られる」は下一段の活用に似てゐる。

動詞の例	未然	連用	終止	條件	命令	接續
言は	れ	れ	れる	れれ	れ(よ)	四段
教へ	られ	られ	られる	られれ	られ(よ)	以上ノ外ノ活用

【四六】せる　させる

夏がくると、これに一面に朝顏や花豆を這はせる。

船頭に賴んで舟をそちらの岸に著けさせ、一人雜木林の茂みを搔分けてその島の上にと登つて行つた。

上の例の「せる」「させる」は共に他のものに動作をさせる意味即ち使役をあらはす。その活用形は下一段の活用に似てゐる。

動詞の例	未然	連用	終止	條件	命令	接續
行か	せ	せ	せる	せれ	せ(よ)	四段
受け	させ	させ	させる	させれ	させ(よ)	以上ノ外ノ活用

【四七】ぬ　ない

耳を澄ましたが何の物音もせぬ。

私は可愛くて可愛くて堪らない。

上の例の「ぬ」「ない」は打消の意味をあらはす。「ない」の活用形は形容詞に似てゐる。「ぬ」は特別な形であるが、未然形は遣ふことが稀である。

動詞の例	未然	連用	終止	條件	命令
書か	ず	ず	ぬ	ね	○
書か	○	なく	ない	なけれ	○

【四八】う　よう

今度は何して遊ばう。

何といふ自然な、しかし、また何といふ尊いことであらう。

甲板の上には既に若干の外人が太平洋上の曙の富士の又なく美はしい姿を見ようと待ち構へてゐた。

上の例の「う」「よう」は共に前もつて後のことを想像する意味や豫期する意味をあらはす。「う」は四段活用に附屬し、「よう」は其の他に屬するものであるが、共に終止形だけで他に活用形をもたない。

【四九】未然形附屬の助動詞は上に擧げた通りであるが、之をまとめて見ると次のやうになる。

(イ)受身、能力、敬意をあらはす。……れる　られる

(ロ)使役をあらはす。……せる　させる

(ハ)打消の意味をあらはす。……ぬ　ない

(ニ)未來の想像、豫期の意をあらはす。……う　よう

【五〇】た

爺さんは青々とした野生のうどを提げて歸つて來た。

十八歳の學生ガリレオは此事を發見したのでした。

羽衣をおかへししたら、あなたはまはずにかへつておしまひになるでせう。

上の例の「た」はその事の了つた意味をあらはしたり、過ぎ去つたことを思ひ出し、それをいひあらはしたりするものである。その活用形は次のやうである。

動詞の例	未然	連用	終止	條件	命令
書い	たら	たり	た	○	○

【五一】て

日が落ちて、西の空は夕ばえが一きは美しい。

貧苦と戰ひあらゆる困難にたへて、遂に此の成功を見たのである。

上の例の「て」はその事の了つた意味をあらはすものである。「て」は連用形だけである。

【五二】たい

早く助けてやりたい。

あゝきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。

上の例の「たい」は希望の意味をあらはすに用ゐられるものである。活用形は形容詞とひとしい。

【五三】連用形附屬の助動詞は上に述べたが、之をまとめてみると次のやうになる。

(イ)過去の追想の意又は完了の意をあらはす。…た

(ロ)完了の意をあらはす。……て

(ハ)希望の意味をあらはす。……たい

【五四】らしい

見渡した沼津の宿はほんのり霞をこめて、春雨が靜かに降つて居るらしい。

上の例の「らしい」は其の事を推量する意味を示すものである。その活用形は形容詞に似てゐる。

【五五】**まい**

命をすてゝかゝつたら救へないことはありますまい。

そんなことはあるまい。

上の例の「まい」は、其の事を打消す心で推量する意味をあらはす。「まい」は終止形だけで他の活用形はない。これは上一段活用、下一段活用の語などには次のやうに連用形につくことがある。

それにつけても御主君尼子家の御恩を忘れまいぞ。

【五六】以上終止形附屬の助動詞を述べたから、これらをまとめてみると次のやうになる。

(イ)推量の意をあらはす。……らしい

(ロ)打消しながら推量する意をあらはす。…まい

右を通じてみるといづれも推量の意味をあらはすに用ゐる助動詞であることがわかる。

【五七】助動詞一つで意味が十分にあらはれない時には、必要に應じていくつかの助動詞を下に〳〵と重ねてつけることがある。かやうに助動詞がいくつも連結してゐる場合には、先づこれを一つ一つの助動詞に分解して、その各〻のあらはす意味を考へ、それからその全體の意味をまとめて考へねばならぬ。

やがて男の兒は走つて來て犬を捕へて吠えさせない。

白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて目も口もあけられない。

心の底まで清められた乘員はこれから訓練に取掛るのである。

此の惡い風習を止めさせよう。

もうお父さんがおかへりになつたらしい。

つく〳〵と感じさせられた。

練習　七

一、次の文の中から助動詞を抽き出せ。

(1)あれは名高い觀音の森であらう。

(2)誰でも驚かない者はあるまい。

(3)失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。

(4)私たち女子の組も先生に連れられて大演習の拜觀に出かけました。

二、次の助動詞の活用をいへ。

(1)雨も降らず、風もふかぬ。

(2)發達をはからなければならない。

(3)かうなつてはとてもじつとしてはゐられない。

(4)本道は遠いからと云つて近道を通らうとしてはいけない。

(5)つまらぬ事は思ふまい。

(6)美しい花を見ました。

(7)これが若し目をつぶつて居たら居眠をして居るといひたいところですが、圓い目を見張つて居るのですから、どうしても何かひどく考へ込んで居るとしか思はれません。

三、次の文の中の助動詞の意味をいへ。

(1)お寺へ參詣せられた。

(2)發達を計らねばならない。

(3)月が明らかで水底の砂がはつきり數へられる。

(4)夕日は今にも山のかなたへ落ちようとしてゐる。

(5)美しい名畫になると何べんでも見たい。

(6)雨が降つたり風がふいたりして靜かな空が少い。

(7)事實はそれに相違ありますまい。

(8)時には生のじやがいもしか食はれないこともあつたらしい。

第九章　副詞

【五八】空がにはかに晴れて太陽がかがやきだした。
日ははや沒して、わづかに殘照が西の空をそめてゐる。
山はいよいよ高く、路はますます險しい。

上の例の「にはか」「はや」「わづか」「いよいよ」「ますます」などは、どれも次に來る「晴れて」「沒して」「そめて」「高く」「險しい」などの用言に副うて、その意味を委しくするに用ゐる詞である。このやうに他の語の上に副うてその意味を委しくするに用ゐる詞を副詞といふ。副詞には活用がない。

【五九】副詞には「に」「と」の助詞の助けをかりて、その作用を全うするものがある。その例を擧げよう。

(イ)「に」のつくもの。
ほのかに。しづかに。たひらかに。ねんごろに。正確に。

切に。優に。自然に。

(ロ)「と」のつくもの。
から〳〵と。にこ〳〵と。しづ〳〵と。さらりと。きりりと。
悠々と。髣髴と。判然と。

これらは狀態を委しくする副詞である。

【六〇】副詞には又他の副詞の上に副うて、その意味の程度を委しくするものもある。
やや暫く考へた。

このやうに用ゐられるのは程度をくはしくあらはす副詞だけで、
甚だ。頗る。もつとも。ただ。
などがこれに屬する。

【六一】副詞には、下の用言のいひ方に一定の約束をもつてゐるものがある。たとへば、

この自然の奇工に傳說の伴ふのも決して偶然ではない。

若し自分にもこんな親友をもつことができるなら、王者の富貴も榮華もいらない。

なぜこんなにしてしまつたのか。

などの文にある「決して」「若し」「なぜ」のやうなのがそれである。これらは下を肯定せねばならぬもの、打消にせねばならぬもの、疑問にせねばならぬもの、或は條件にせねばならぬもの、或は意味をつよめるものなどである。この類の副詞にはなほ次のやうな語がある。

必ず。　もつとも。　是非。　さすが。　恰も。　さも。

よもや。　たとひ。

練習八

一、次の文中から副詞を抽き出し、どの用言に副うてゐるかをいへ。

(1)そこに陳列してある機械の前にすわつて、じつとそれに見入つて居るのであつた。

(2)氣候がだん〳〵あたたかくなります。

(3)お友達は時々來て下さいましたが、私はまだ一回もお友達の家をお訪ねしたことがありません。

(4)月が西の空にうつすりと殘り、野には朝露がしつとりと置いてゐた。

(5)殿下はただちに自動車で統監邸に入らせられた。

(6)今はちやうど新綠の季節で湖岸の大道や公園の眺はさすがに美しいと思ひました。

二、次の副詞を用ゐてそれ〳〵短い文を作れ。

青々と。　まだ。　靜かに。　しつかり。　につこり。　もつとも。

すこぶる。　とうとう。

第十章　接續詞

【六二】國はどこ、又親の名は何と申す。

しかし佐吉は何と言はれてもたゞだまつて研究の歩を進めた。

上の例の「又」「しかし」などは上下の語を連ね、又文と文との間に入つてその意義を結びつけるに用ゐられる。このやうな詞を**接續詞**といふ。

練習　九

一、次の文の中から接續詞を抽き出せ。

(1)光の強い部分もあれば、弱い部分もあり、又所々に黑點と云つて黑く見える所もある。

(2)表現卽ち實體の半ばと位はいつても差支へなからうと思ひます。

(3)有難うございます。しかし誠に粗末なピアノで。それに樂譜もありません。

(4)筒鳥の聲は極めて圖拔けた間の拔けたものであるが、それをやゝ小さく且つ人間くさくしたものに呼子鳥といふのがゐる。

二、次の接續詞を用ゐて短い文を作れ。

或は。　しかし。　又。　もつとも。

第十一章　感動詞

【六三】あ、西の空がほんのり明るい。

おお、降つたは〳〵。

さあ、持つて行つて下さい。

やあ、みんな早いね。

上の例の「あ」「おお」「さあ」「やあ」などは何れも物事に感じた時などに發することばで、これを**感動詞**といふ。

練習　一〇

一、次の文の中から感動詞を抽き出せ。

(1)おお〳〵大分お濡れなさつた。

(2)ああ、あれは僕の作つた曲だ。

(3)あらどうしたの。泣いて居るぢやありませんか。

(4)さあ大變な事をしました。

(5)そらまた浪が寄せてきたぞ。

(6)一體まあ、あなたはどういふ御方でございますか。

二、次の感動詞を用ゐて短い文を作れ。

ああ。やあ。まあ。さあ。おや。

第十二章　助詞

【六四】夏が來た。

岡の上に登ると見えます。

雨まで降り出した。

これこそ大變です。

花がね見事に咲いてゐましたよ。

上の例の「が」「の」「に」「と」「まで」「こそ」「ね」「よ」などは他の詞に附屬してその詞と他の詞との關係を明かにする爲めに用ゐられる詞で、これらの詞を**助詞**といふ。

【六五】助詞には活用がない。常に他の詞の下に附屬して用ゐられ、獨立して一つの考へをあらはすはたらきをもたない。

【六六】助詞は、他の詞に伴つて用ゐられてゐる狀態と、その示す關係とから見て六種類に分けることが出來る。

【六七】詞と詞との間の一定の關係を示す助詞。(**格助詞**)

の……梅の花。　浮世の波。　近くの山。

が……君が代。　水田がよく開けて稻が青々とのびてゐる。

を……書を讀む。　路を行く。　空をとぶ。
に……父に似る。　酒に醉ふ。　都に住む。
と……月と花。　父と語る。　雪と散る。
へ……西へ行く。　どちらへいらつしやいますか。
より……山より高い。　花より團子。
から……學校から歸る。　秋は蟲の聲から始まる。
で……筆で書く。　東京で見た。　花である。

この種類の助詞はその指す所が嚴密にきまつてゐて、同類の助詞をみだりに重ねて用ゐることの出來ないものである。

【六八】用言に附いてその用言と次の語句とを接續させる助詞。（接續助詞）

ば……來なければ呼びにやれ。
日が西に傾いても日本ならばまだ〳〵と思はれる時分、こ

こではあつといふ間に日が落ちてしまふ。
四時を過ぎればもう夕方だ。
とも……晝間は、どんなに暑からうとも、日光はかすかに黃色味を帶びて壁や塀の強い反射が幾分やはらいで見える。
と……ちつとも聞えないと、尙聞きたい。
午後になると、間もなくうすら寒くなる。
が……私も知つてゐるが、親切な方です。
に……早く來ればよいに、まだ來ない。
のに……こんなに海が荒れるのに、君はよく平氣でゐられるね。
けれど、けれども……
うろうろとして其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない。
私たちもやりたいけれどもまだ出來ません。

し……幅もあるし、骨組も丈夫になつた。

から…小さなねぢが一本いたんでゐましたから、取かへて置きました。

も……二階へ上つてみても、さして涼しい風はなささうである。

この種類の助詞には順に續く條件を示すものと、反對の結果を導く條件を示すものと、單に前後を接續させるものとがある。さうしてその上に來る用言を受けるのにも一定のきまりがある。そのきまりは次の通りである。

(1) ば
- (イ) 未然形を受けるもの。（但し、これは稀につかふだけである。）
- (ロ) 條件形を受けるもの。

(2) とも
- (イ) 形容詞には未然形を受ける。
- (ロ) 動詞には終止形を受ける。

(3) と　動詞の終止形を受ける。

(4) が、に、のに、けれど、けれども、し、から　すべての用言の終止形を受ける。

(5) も　助動詞「て」の下につく。

【六九】いろ〳〵の語に附屬して下の用言の意味に關係を及ぼす助詞。（副助詞）

ばかり…ふだん下からばかり見上げてゐた柿の木が今は足下にある。

まで……松林がどこまでも續く。

私は此歳になるまで蜂の此のやうな擧動を詳しく見たことがなかつた。

など……あめんぼなどはかなり巧みな方ではあるが、その運動はなほ直線的でごつ〳〵してゐる。

やら……誰やら來たやうです。

何が何やらさつぱりわかりません。

だけ……どれだけの時間がたつたらう。

私も出來るだけ音をたてないやうにして歩きました。

ぐらゐ……大きな犬ぐらゐの大きさである。

百圓ぐらゐかゝりませう。

か……つぎの雲もどこへか行つてしまつた。

【七〇】用言の叙述に力を及ぼす助詞。(係助詞)

この助詞は種々の語に附いて下の用言のいひ方に力を及ぼすものである。

は……沿道の景色は内地とは大分變つてゐる。

も……歌も句も詩も讀まなくてはならぬ。

こそ……それこそ天下の奇觀です。

見忘れたか、われこそその百合若だ。

さへ……模型飛行機が飛ぶのですから、其の大きい物を作りさへすれば、きつと人間も飛べるに違ひありません。

機内では自分の聲さへきこえない。

でも……お茶でもおあがりなさい。

多分山鳥ででもあらうか。

しか……何だあんな弓しか引けないのか。

【七一】常に文句の終りにばかり用ゐられる助詞。(終助詞)

か……どちらへいらつしやいますか。

よ……もう東京ですよ。

え……どうしたの、寢られないのかえ。

ろ……お前たちはいつたい誰にきいてのぼつて來た。下りろ。

な(禁)……やせ蛙まけるな。(動詞にだけつく)

な(感)…聞きたいな。

おやあれは何だらうな。

さ……これが四十日間の汗のたまものさ。

此の種の助詞には疑問、感動、希望、禁止などをあらはすものが多い。

【七二】語調をととのへ、語勢をそへ、呼掛、感動の意などをあらはす助詞。(間投助詞)

や……わたしはもう一度お前を追ひはらつて、野や山をまつ白にしてやる。

ぞ……これぞと思ふ程の事もない。

先刻の雨でどこぞへ逃げました。

ね……閑靜でいゝね。

あのね、其處にじつとしてゐるのよ。動くのぢやありませんよ。今山本が行きますからね。其處におとなしくしてゐるのよ。

この助詞は他の助詞に比し比較的自由に用ゐられる。

【七三】助詞の「を」「へ」「ぐらゐ」「は」「さへ」などは假名づかひを誤らぬやうに注意せねばならぬ。

練習　一一

一、次の文章の中から助詞を抽き出せ。

(1)二歳駒の市が始ればいよ〳〵北斗と別れなければなりません。

(2)教へられたとほりそのまま守つてゆくのは勿論素直なことである。しかし教へられただけを守ることはかならずしも權威あることではない。

(3)どれも〳〵美しく愛らしいものであるが、やはり我々日本人が國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。

二、次の文章の○の處に適當な助詞を補ひ、その補つた助詞の性質を考

へよ。

(1)國○いふもの○先祖○○傳へられた一つ○寶物○、大切な財產でありますの○○これ○立派に維持して成るべく豐富○し善美にするの○子孫たるわれわれ○本務○あります。

(2)そのお喜び○伺つて、私ども○どのやうに嬉しい○分りません。今度は今度は○お身の上○危みながらお見立て申して居りました○今度ばかり○安心してお見送り申す事○出來ます。

(3)あなた○まだお若い○○、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究○大成すること○出來ませう。たゞ注意しなければならないのは順序正しく進む○いふことです。これは學問の研究○は特に必要ですから、先づ土臺○作つて、それ○○一歩一歩高く登り最後の目的○達するやう○なさい。

第十三章　「ある」と合成した詞

【七四】動詞「ある」は

ここに梅の樹がある。

これは梅の樹である。

といふやうに存在の意味をあらはしたり、又說明指定の意味だけをあらはしたりするものであるが、この詞は其の用法が非常に、廣くて樣々の詞と結合して、いろ〳〵の形になつて用ゐられる。

【七五】

葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。

此の邊から上つたらよからうと氣づいて松原に向つて上つた。

上の例の「好かつた」「よからう」は形容詞の連用形「好く」が「ある」と結合して一體になつたもので「ある」と同じ樣な用法になるのである。このやう

な詞は形は動詞のやうであるが、その意味は形容詞に似てゐるから特に之を**形容動詞**と名づける。

【七六】形容動詞に似た事が、助動詞と「ある」との結合によつて起る。たとへば、

あの時分はアムモニア水を塗るといふやうな事は誰も知らなかつたのである。

實はたべたかつたのを我慢して半分殘して來たのをポチにやる。

兄上も大聲を揚げて何か云つてゐるらしかつた。

上の例は「ない」「たい」「らしい」といふ助動詞の連用形「く」が「ある」と結合して一體になつたものである。かやうな場合は形容詞に似た活用形をもつてゐる助動詞に見る所である。

【七七】助詞の「で」から「ある」につゞいて「である」といふことは「七四」に云つたやうに説明指定の用をなすものであるが、その「である」と同じ意味と用法とをなすものに「だ」といふ語がある。

富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。

山鳩だらう。

非常に靜かだ。

「だ」は上のやうに未然形と終止形とがあるが、終止形の「だ」は「である」を結合して一としたものの「る」が省かれたものであらう。又

この瞬間の君の心には優勝した時の名譽感情も自然感情も全く捨てられてゐたのでせう。

さすがのチルデン君も顏色がありませんでした。

清水君も清水君ですが、米人もさすがに米人でありました。

これは未然形の「でせ」連用形の「でし」終止形の「です」の三の活用形が用ゐられるが、説明指定の用をなすことは「であると同じであるが、少し敬意のある點がちがふのである。これらの「だ」「です」を特に**指定の動詞**といい

ふこともある。「です」は「である」「だ」に比べると少しく敬意を含んでゐる。

【七八】

雪國が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は横絲だ。

政治家なり武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは非常に其の人品を高くするものである。

何なりと召し上れ。

好きなればこそ上手になつた。

これは上の例のやうに未然形と連用形と條件形とだけ用ゐられる語である。この「なり」といふ語はもと文語にいふ「ナリ」で「ニ」といふ助詞と「アリ」との合成によつて生じたものの名殘である。これは體言につくものでその意味と用法とは「である」に似てゐるものであるから**指定の動詞**と云うておく。又副詞につく「なり」がある。それは

靜かなら寢つかれよう。

夜は靜かなり月は清らかなり申し分のないことだ。

私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

靜かなればこそこんな山にも住んでゐるのである。

これは上の「なり」と似てゐるが、終止形が「な」となつて「る」の省かれてゐる所がちがふのである。これも**形容動詞**といはれることがある。

練　習　一二

一、次の文の中に用ゐてゐる「ある」といふ語の意味を見分けよ。

(1) 見るからに樂しげである。

(2) 此の俵があれば遠くからでも芋掘の人々であることがわかる。

(3) 道に添うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。

(4) 是非國民の愛護して行かなければならないものが澤山あると考

へます。先づその第一は國體でありませう。ついでは國民が祖先から傳へられた淳風美俗でありませう。或は更に建築、繪畫、彫刻等の古藝術もありませう。山水其の他の自然美もありませう。

二、次の文の中から形容動詞及びそれに似た助動詞を抽き出せ。

(1)何ともいへぬ優雅な趣を帶びてゐる。

(2)何が何やらさつぱりわからなかつた。

(3)工合の惡かつたのは其の爲でした。

(4)甚次郎は胸がこみ上げるやうに嬉しかつた。

(5)ほうお前が世話をしようといふのか。よからう。一つやつてごらん。

三、次の文の中に用ゐてある説明指定の「ある」及び指定の動詞を説明せよ。

(1)艦内は深山のやうな靜かさである。

(2)天井の高い廣々とした室はしんとして靜かだ。

(3)あゝいふねぢはもう無くなつてあれ一つしか無いのだ。

(4)事實に於て内容と形式とはそんなに手輕に引き離せるものではありますまい。

(5)といふのは、彼等も亦飛行機を作ることが年來の望であつたからです。

第十四章　文

【七九】人の考へや思ふこと卽ち思想が言語によつてあらはされたものを文といふ。

月が清い。　花が咲く。

犬が走る。　人が歩む。

吾輩は猫である。　お前は誰だ。

これらの例は詞の數も少なく、形も短かいけれども、まとまつた思想があらはされてゐるから文である。

【八〇】これに對し多くの詞を連ねても完全な思想をあらはさないものを**連語**といふ。

爛漫と咲き亂れた櫻の花。

見渡す限りうね〳〵と打續く畠。

これらの例は多くの詞を連ねて、一の連續した語をなしてゐるけれども、未だ完全に思想をあらはしてゐないから連語である。

【八一】文を組立てるには普通には體言に對して用言が説明をする。その説明をする語を**述語**といひ、説明せられる語を**主語**といふ。用言の性質によつてはその説明を完全にする爲に補ふ語を要することがある。その補ふ語を**補語**といふ。たとへば

人が水を飲む。

といふ場合に「人」は主語、「飲む」は述語、「水」は補語である。

【八二】文や連語にあつて體言なり用言なりの意味を委しくする爲にその上に或る語を加へて修飾限定することがある。たとへば

美しい花がみごとに咲いた。

といふ場合の「美しい」「みごとに」などは「花」といふ體言、「咲いた」といふ用言を修飾したものである。

【八三】すべて文の組立ての上に骨子となるものは體言と用言とであつて、助詞、副用語などは體言、用言を助けるものである。

練習　一三

次の各項が文であるか、連語であるかを判定し、文の場合には主語と述語とを示せ。

(1) 薄暗いばかりに茂つた楓。

(2) 今日は元日でございます。

(3)水の流れる音がする。
(4)國民の燃えるやうな熱誠。
(5)椿は今花盛りである。

第十五章　敬語

【八四】國語では交際上、他人に對して尊敬する意を表はす爲に特別な語遣をすることが少くない。かやうな場合に特に用ゐる語を**敬語**といふ。この敬語の發達してゐることは國語の一特徴であつて、それは單語だけの現象ではなく文の組立にも關係をもつてゐる。それ故便宜上こゝに一括して其の大要を述べよう。

【八五】敬語では自分の事については謙つた語遣をし、相手や他の人の事に對しては敬つた語遣をするものである。前者を**謙稱**といひ、後者を**敬稱**といふ。

その事はあとでゆつくり申上げます。
あなたまでがさう思召しますか。

この例の中の「申上げます」は謙稱であり、「思召します」は敬稱である。

【八六】敬語は體言と用言と副詞とにあらはれるものであるが、それらの用ゐ方には一定の規律のあるものである。本書では先づその種類を明かにすることにする。

【八七】名詞の敬語

(一)敬稱。

天皇。皇后。皇太后。皇太子。親王。王。妃。
陛下。殿下。宮。閣下。
叡慮。行幸。天顏。おぼしめし。
尊父。令姉。貴家。芳墨。高名。
み心。大御稜威。おみあし。

おん徳。お友達。お認め。
ご老人。御感動。御意。
父上。山村殿。嫁御。神さま。叔母さん。
宮様がた。高山くん。長松どん。妹ご。
お嬢さま。お醫者さま。ご尊父さま。
ご隠居さん。おぢいさん。お松どの。お竹どん。

名詞の敬稱にははじめから敬語として生じたものもあるが、又普通の語を基として「み」「大御」「おん」「お」「ご」などを上につけたり「がた」「くん」「さま」「さん」「どの」などを下につけたりして作つたものが多い。

(二)謙稱。

小生。拙者。粗品。

【八八】代名詞の敬語　代名詞には本來の敬語は少い。「あなた」「どなた」の他稱から對稱に轉用したものが、敬語と認めるべきものである。又

どなたさま。あなたさん。お前がた。

それらの下に「さま」「さん」「がた」をつけて用ゐることもある。これらはみな敬稱である。

【八九】數詞の敬語　數詞には「お」「御」を上に冠して

おひとつ。おいくつ。おいくたり。
御三方(ゴサンカタ)。

のやうにいふことがある。これは敬稱だけである。

【九〇】形容詞の敬語　形容詞では「お」などを上に加へるものの外には敬語はない。次のはその一例である。

あちら様は大層お美しういらつしやいます。(敬稱)
實におはづかしう御座います。(謙稱)

【九一】動詞の敬語

(一)敬稱

めす。おぼしめす。あがる。めしあがる。
あそばす。なさる。くださる。いらつしやる。
おつしやる。

(二)謙稱

まうす。いたす。つかまつる。いたゞく。
あがる。まゐる。うかがふ。うけたまはる。
ぞんずる。參上する。ます。です。ございます。

次に敬語の用例を少しくあげよう。

どうぞ、あれへお通り下さいませ。
草餅はいりませんか。
おゝ大分お濡れなさつた。
きつと御言葉の通りに致します。
土曜日にはおたづね申します。

失禮ながらお名前をきかせて頂きたうございます。
お見舞にあがりました。
ひどい暑さです。
不思議なことでございます。

【九二】本來敬語でない動詞でも、**敬意の助動詞**がつくと敬稱になる。敬意の助動詞については既に述べた。

【九三】**副詞の敬語**

御體質は元來御壯健でいらせられる。
まことにおあいにくさまです。

これらは普通の副詞の上に「おん」「ご」「お」をつけ、又は下に「さま」をつけなどしてつくるものである。なほその語の例を次にあげる。

おんすこやか。御丈夫。ごゆつくり。
おあいにく

いかがさま。
おあいにくさま。　おまちどほさん。
ご退屈さま。

これらはいづれも敬稱だけである。

【九四】すべて敬語は交際上に用ゐる言語の一の方式であつて、他を敬ひ自分を謙る精神をあらはすと共に、自己の品位を保つものであるから、その使用を誤らぬやうにしなければならぬ。

練習　一四

次の文の中にある敬語を抽き出して、敬稱か謙稱かを考へよ。

(1) あなたはかやうにあそばせ。
(2) 左樣なれば頂戴いたします。
(3) あれは私のでございます。
(4) 是非拜見いたしたう存じます。

(5) ごくらうさま。　おつかれでせう。
(6) 今日はようこそおいで下さいました。
(7) 陛下は外套をも召されず、熱心に戰況を御覽になつていらつしやいます。
(8) いづれも極めて御質素なものばかりである。

練習　一五

(1) 動詞活用の見分け方を述べよ。
(2) 假名遣の誤り易い動詞の活用をいへ。
(3) 動詞の活用形の用法を活用の各〻の種類について述べよ。
(4) 動詞と形容詞との音便についてのべよ。
(5) 助動詞の主なものをあげて活用表をつくれ。
(6) 助詞の種類をいへ。
(7) 形容詞、助動詞、助詞等にあるが結合した場合に、如何にその詞を變

化するかについてのべよ。

(8) 敬語に關係ある助動詞をあげよ。

(9) 名詞、代名詞の敬語を述べよ。

(10) 形容詞、動詞の敬語を述べよ。

(11) 副詞の敬語を述べよ。

昭和十二年八月二十六日　印刷
昭和十二年八月三十日　發行
昭和十三年一月二十八日　訂正再版印刷
昭和十三年二月一日　訂正再版發行

定價　金三拾四錢

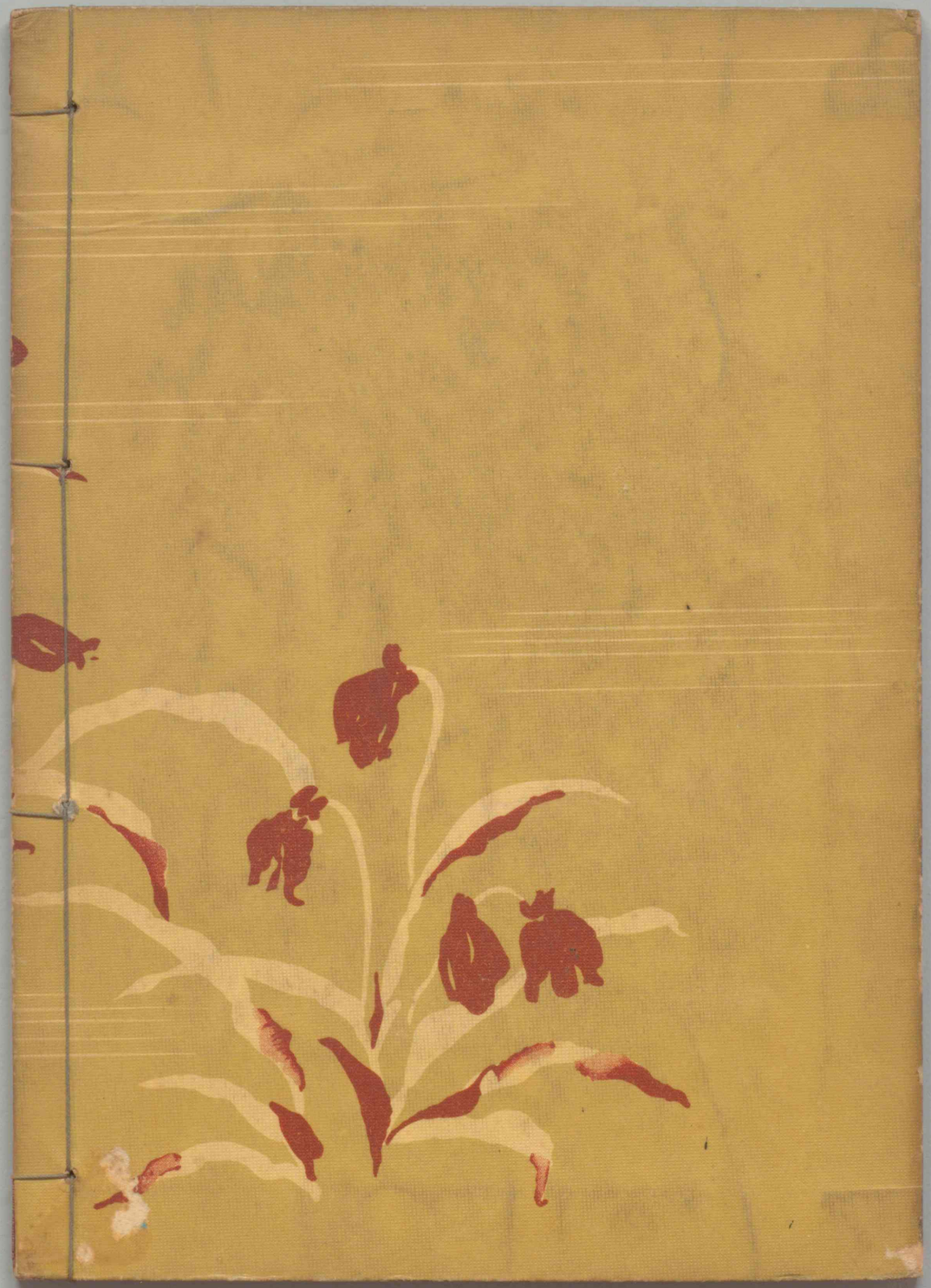
著作者　山田孝雄

發行者　東京市日本橋區室町四丁目五番地八　株式會社　寶文館
代表者　大葉久治

印刷者　東京市牛込區山吹町百九十八番地　櫻井專吉

高瀨印刷所印刷

女子日本文法教科書　初級用
不許複製

發行所　東京市日本橋區室町四丁目　振替口座東京二八〇番　株式會社　寶文館
關西專賣　大阪市西區阿波堀通四丁目　振替口座大阪四三番　株式會社　大阪寶文館

御審査用　寶文館　大阪